

平成15年度シドニー大学看護学部学生研修に関する報告

中 嶋 律 子, 森 雅 美, 河 合 洋 子

The Report on the Students' "Shadowing" Program at Faculty of Nursing, the University of Sydney 2004

NAKAJIMA Ritsuko, MORI Masami, KAWAI Yoko

キーワード：学生，海外研修，シドニー大学，看護学部，評価

Key words：students, shadowing program, the University of Sydney, Faculty of Nursing, evaluation

1. はじめに

昨年度に引き続き、「本学部が学術交流協定を締結したシドニー大学看護学部の学生との交流や、施設の見学などを通して、オーストラリアの文化や医療、看護を知り、国際的視野を養う」ことを目的に、平成15年度シドニー大学看護学部学生研修（以下、学生研修）が開催された。

平成15年度の学生研修については、その実施要領の検討、学生の募集と参加学生の選考、旅行代理店の選定をシドニー大学との交流担当小委員会（委員長：森雅美教授）で検討し、その後のシドニー大学看護学部との調整や、学生へのオリエンテーション、旅行代理店との連絡や調整、学生の事前学習等は同行した委員を中心に進め、直前のプレゼンテーションの準備にあたっての学生への援助は同行教員2名で行った。平成15年度の研修には、中嶋律子シドニー大学との交流担当小委員会委員と尾崎伊都子助手が同行した。

2. 学生研修の概況

1) 学生の選考

平成15年度は6名の募集に対し7名の応募があった。シドニー大学との交流担当小委員会において1名の増



写真1 平成15年度シドニー大学看護学部学生研修参加学生（シドニー大学看護学部棟前にて）

名古屋市立大学看護学部シドニー大学との交流担当小委員会委員

Nagoya City University School of Nursing (Project Team for Academic Exchange between Nagoya City University School of Nursing and Faculty of Nursing, the University of Sydney)

平成15年度シドニー大学看護学部学生研修に関する報告

員について検討した結果、増員は可能であろうと判断されたため、応募学生に説明した後、応募のあった7名全員を参加学生として選考した。その後辞退者もなく、平成15年度は、2年生3名（加賀田聡子・加藤有美・藤野泰平）、3年生4名（佐古真利乃・千田美咲子・北條真依子・船戸千寿）の計7名が研修に参加した。

2) 事前準備

出発前に、オーストラリアの医療や看護に関する事前学習、シドニー大学での学生との交流会でのプレゼンテーションの準備、学生研修に関するオリエンテーションなどを、計6回にわたって実施した。事前学習では、3回にわたってオーストラリアの医療や看護について日本語で紹介された文献を基にオーストラリアと日本の違いについても触れながら学習を進めた。交流会でのプレゼンテーションの準備については、学生が、選んだテーマについて分担して準備し、それらを持ち寄って調整するという形で進めたが、全体の調整

や英語に訳すことに時間を要し、交流会前夜までリハーサルと微修正が続くこととなった。参加学生が2学年にわたっていたため、時間割や実習のスケジュール等が異なり、学生間での話し合いの時間が十分に確保できなかったことなどが原因となっていた。

学生研修に関するオリエンテーションに加え、出発約1ヶ月前に旅行代理店の担当者から、現地の気候や治安の状況、旅行に向けて準備することなどについて説明を受けた。7名中4名は今回が初めての海外旅行であったため、旅行代理店の担当者からの説明を通して旅行に関する情報を得ることができ、具体的な準備に取りかかれたようである。しかし、オリエンテーションだけでは解決できない学生個々の疑問もあり、それらについてはその都度対応した。

3) シドニー大学看護学部での研修

研修日程と、シドニー大学看護学部での研修プログラムは表1と2に示したとおりである。初日に、研修のオリエンテーションと、それに引き続いてオースト

表1 平成15年度シドニー大学学生研修の日程

月	日	行	程
3月	12日(金)	夜名古屋を出発	
3月	13日(土)	ケアンズを経由してシドニーへ到着。 到着後シドニー市内を見学しながらホテルへ。	
3月	14日(日)	講義・tutorialに参加するための準備、 プレゼンテーションの準備。自由時間	
3月 3月	15日(月)～ 19日(金)	シドニー大学看護学部での研修プログラムに参加	
3月	20日(土)	研修のまとめ	
3月	21日(日)	早朝シドニーを出発。ケアンズを経由して、夕方名古屋到着。	

表2 シドニー大学看護学部での研修内容

月 日	午 前	午 後
3月15日(月)	Introduction Overview of program The Australian health care system Nursing in Australia Indigenous Nursing	Tour of faculty and university campus
3月16日(火)	Subjectivity and Health Care lecture Special lecture [Nursing Research]	Tutorials: Family Health Nursing (3名) Subjectivity and Health Care (2名) Nursing and Biomedical Interventions (2名) 16:30～ Refreshments with students and faculty staff (交流会)
3月17日(水)		Tutorials: Subjectivity and Health Care (5名/2グループ) Nursing and Biomedical Interventions (2名)
3月18日(木)	Visit Royal Prince Alfred Hospital	Tutorials: Family Health Nursing (5名/2グループ) Nursing and Biomedical Interventions (2名) Conclusion and summary of visit
3月19日(金)	Visit Royal North Shore Hospital	

*プログラム(英文)はシドニー大学看護学部から示された原文の通り。

ラリアのヘルスケアシステムや看護などについて講義を受け、2日目から授業に参加したり、病院を見学した。事前学習が、初日の講義の内容を理解するのに役だった。

事前にシドニー大学側から初日のオリエンテーションと講義、病院見学には通訳をつけて欲しい旨が伝えられた為、この3回には通訳者を依頼した。通訳があることで学生は正確かつ十分に理解できただけでなく、積極的に質問したり意見を述べたりできていた。

(1) 授業への参加

今回学生が参加した授業科目は、昨年度とは異なり、全てシドニー大学看護学部2年次に開講される新カリキュラムの科目であった。シドニー大学看護学部では、今回の参加学生が本学の2年次と3年次のカリキュラムを修了した学生であることは承知していたが、シドニー大学看護学部が現在新カリキュラムへの移行期にあり、改善される前のもの(3年生、4年生に開講される科目)に参加してもらうことは望ましくないという理由でこのようなプログラムが計画された。科目の構成が本学とは全く異なっていたため、学生は、既習の科目というよりも、習ったことのある内容が出てくるが少し違う科目という印象を抱いていた。また、習ったことのある内容が少しずつ含まれていたことが、英語での授業を理解する助けになっていた。

授業への参加にあたっては、研修の約1ヶ月前に、学生研修に計画されている科目の概要と学生が参加する日の授業のシラバスが本学に届けられ、科目の概要とシラバスにリストアップされている参考文献を読んでくるようにという指示があった。チュートリアルが3科目あるので学生2～3名に分かれて参加するよにということであったため、3グループに分かれ、それぞれに自分の参加する科目を選んで科目概要を読んで準備して行ったところ、初日のオリエンテーションで配布された資料では、2～3名1グループに分かれて3科目全てのチュートリアルに参加することになっていたというハプニングがあったが、それぞれに読んできた科目概要を他の学生に説明することで対応できていた。しかし参考文献については、出発時に確認したところ、全員の学生が読んでいないという状況であった。その理由は、語学力の問題から与えられた時間内では科目概要を読むのが精一杯だった、文献リストをもとに自分で文献を集めて予習するということを理解していなかった、手渡されたシラバスを文献と勘違いしていた、などであった。科目概要とシラバスが届いてから出発までの約1ヶ半月の間には、後期末試験や1～2週間の実習があり、時間的に十分なゆとりが

なかったことも影響していると考えられるが、学生達は授業等で教員から与えられたものをこなすことが当たり前となっており、自分で準備するということに不慣れであったことも影響していた。

今回の研修では、学生が参加した授業のほとんどがチュートリアル形式であった。このチュートリアルによる教育は、看護学部独自のものではなく、シドニー大学が大学全体で導入している教育方法である。学生は各科目、週1回の講義と週1回のチュートリアルを受講することになっている。チュートリアルのグループ数は学部や科目によって異なるが、看護学部では、1週間に同一科目で8グループのチュートリアルを開講しているということであった。各チュートリアルには約20名の学生が配されており、今回の研修ではその中に本学の学生2～3名が加わるという状況であったが、教員や他の学生が今取り組んでいる内容などを丁寧に説明してくれたお陰で、学生達は参加しやすかったようである。特に、交流会後のチュートリアルでは、交流会に参加してくれた学生と一緒に、さらに参加しやすくなっていたようである。研修期間の早い時期に交流会が開催されたことが功を奏していた。

チュートリアルでは、教員や学生からその日のテーマに関連して日本の状況について質問を受ける場面があった。そのような時には説明するのに同行教員のサポートを要することもあったが、それ以外では、学生達は自分たちで話し、積極的に参加していた。シドニー大学看護学部の担当者からも、積極的に授業に参加し、学生達とも積極的に交流していた点を評価されていた。

(2) 病院見学

昨年度と同様、Royal Prince Alfred Hospital と Royal North Shore Hospitalの2カ所を見学した。この2病院はそれぞれ、ニューサウスウェールズ州のArea Health ServicesのMetropolitan & Greater Sydney地区をさらに8分割した小さな地区(図1)の基幹病院であり、どちらもシドニー大学看護学部の実習や、その他の実習や研修を受け入れている教育病院である。病院見学では、それぞれの病院で、Nurse Managerからその病院の概要や看護について説明を受けた後、病院内を見学した。見学場所は、学生の希望を踏まえながら、その時に見学可能な状況にある場所が選ばれた。ICU、NICU、移植外来、外科系病棟、内科系病棟、小児病棟などを見学した。この病院見学時の説明を理解する上で、初日のオーストラリアのヘルスケアシステムや看護に関する講義が役だったようである。

平成15年度シドニー大学看護学部学生研修に関する報告

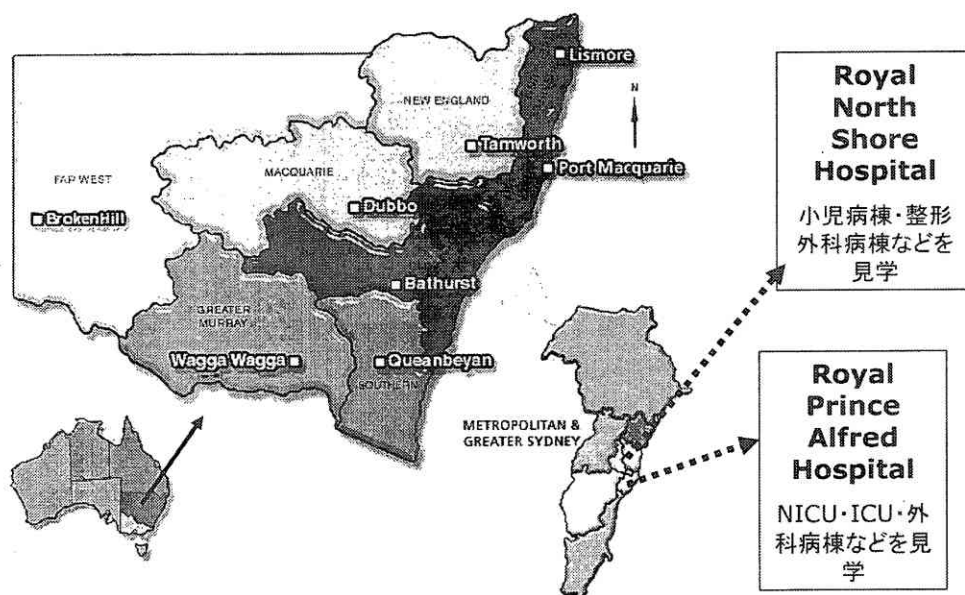


図1 ニューサウスウェールズ州 Area Health Services

(3) 交流会

研修2日目の夕方に交流会が開催された。シドニー大学からは副学部長はじめ学生や教員約20名に参加して頂いた。交流会では、本学の学生達は日本の看護制度や、名古屋市立大学について紹介するプレゼンテーションを行った。参加学生達は自分たちのことと比較しながら関心をもって聴いており、その後の交流でもプレゼンテーションの内容をきっかけに会話が広がり、有意義な交流会となった。プレゼンテーションをやり遂げた達成感や、シドニー大学の学生達と話す時間を持てたことに対する満足感があり、交流会は学生達にとって満足度の高い研修内容となっていた。講義やチュートリアルの際には、シドニー大学の学生から説明して

もらうことはあっても、自分たちから話しかけることができず、「会話」をする機会が乏しかっただけに、交流会は今回の研修でも学生達にとって満足度の高い時間となっていたと考えられる。また、3日目以降のチュートリアルで交流会に参加してくれた学生と一緒に、さらに交流を深めることができたようである。

3. 学生研修の成果

学生研修最終日にまとめを行った。まず、学生個々に1週間の振り返りと、研修を通して自分が変化したことについて記述してもらい、その後、全員で今回の学生研修についてディスカッションした。ここで記述された文章と帰国後に提出された研修への評価を、学

表3 学生研修に対する学生の評価

良 かった 点		改 善 し て 欲 し い 点	
内 容	件 数	内 容	件 数
形式の異なる授業に参加できたこと	4	期間をもう少し長くして欲しい	6
tutorialのような日本とは違う教育方法の授業に参加できたこと	3	アボリジニや僻地医療の授業に参加したい	1
オーストラリアの医療や看護に関する講義があったこと	3	日本とは違う授業内容のものに参加したい	1
病院見学	2	同じtutorialに複数回参加したい	1
キャンパスツアー	2	授業の日程をもっと早く知りたい	1
プレゼンテーションを通してシドニー大学の学生と交流ができ、親しくなったこと	2	日常会話（英会話）を全員で勉強する	1
事前にオーストラリアの医療制度について学習したこと	1	選考時に英語のテストがあったほうが良い	2
通訳があったこと	7		
10日間という期間	1		

表4 学生研修の成果

オーストラリア や日本の看護 に関する理解	オーストラリアでの看護師の役割の大きさを知った
	看護師が白衣を着用していないことに驚いた
	オーストラリアの看護のしくみを知ることができた
	オーストラリアの医療制度を知ることができた
	看護先進国のオーストラリアでさえ、一般国民の看護に対するイメージがあまりよくないことを知って残念であった
	日本にいると考えることもない問題(看護における宗教や習慣への配慮)があったりして、新しい情報を得ることができた
	日本の看護に関して知ることができた
	日本の看護や看護教育について新たな情報を得た
	オーストラリアと日本のよく似ている点や、また反対の考え方のあることを発見した
	日本の病院の良い面・悪い面を考えることができた
	宗教や習慣の違いを含めて人をみて看護していかなくてはならないと改めて感じた
	文化や宗教を含む考え方の違いがあると感じた
	日本に比べて労働環境が整備されていてびっくりした
	看護師としての心構えや地位の向上のために努力すべきことについて学んだ
	日本の病院とは違った雰囲気を感じ取ることができた
	日本にはない外来や病棟の種類をみて、その理由を医療費などの背景と関連づけてみるととても興味深かった
	オーストラリアの病院・看護職について理解することができた
	看護先進国のオーストラリアとの比較によって日本の看護の位置づけについてより深く理解することができた
学習の姿勢や 方法の違いに 関する発見	学生が高い意識で自立して学んでいる姿勢を感じた
	予習に基づいて自信をもってディスカッションで発言していて、自分で学んでいく姿勢が見られた
	授業方法の違いや雰囲気を感じとることができた
	日本のような受け身的な学習ではなく、自分から求める学習だと思った
	学生は自分の意見を持ち、自分の考えや気持ちを述べることができていた
	自分の意見を発言することや自ら学ぶ意欲をもつことの大切さを再認識した
	Tutorialは学生主体の授業となっているように感じた
	シドニーの学生は積極的に知識への探求心があった
	オーストラリアの看護学生は授業に真剣だ
	シドニー大学では授業前に文献を調べたり情報を集めたりすることが必要で学生の自己責任で勉強が行われていると感じた
	講義に対する学生の姿勢の日本とオーストラリアの違いを見ることができた
	20名程度のtutorialでは先生と学生の距離も近く、お互い意見を言いやすい雰囲気だと思った
	様々な人種・国籍・民族の学生がいて、年齢や経験も様々な学生が同じクラスにいるのは、幅広い考え方を知ることができる
自分自身の 学習姿勢に 関する反省や 気づき	予習やtutorial中の発言を自分と比べて恥ずかしくなった
	先方の学生をみて考えることの大切さを学んだ(よく考えることをしていこうと思った)
	学習面で受動的になっているところを能動的に変化させたいと思った
	授業に参加するという点について考えることができた
	向こうの学生の姿勢をみて、私自身の「いいかげんさ」を感じ刺激を受けた
	自分の授業での態度や考えの甘さを振り返ることができた
	友人から刺激されることは大切だと思った
	もっと看護の勉強をしていくことが必要
	自分の問題点・改善点が見え、学びに対する姿勢がより一層高まった
	看護に関して甘い気持ちでいた面を直してもっと勉強に励もうと思う
	自分の意見をもって、それを発言することが大学生として、看護師を志望するものとして重要だと感じた
	意見や質問をはっきり言うことは日本ではあまりないので、日本でも演習などでは積極的に参加できるとよいと思った
	チームの中では、役割と責任をはっきりさせる必要がある
	シドニー大学の学生のほうが全体的に講義に集中していた
	日本で受け身的で自分で考えることをしなかったのが、こんな勉強の仕方があるんだと刺激を受けてやる気が出た
	日本の学生よりもはるかに勉強していると感じ、自分自身もっと勉強しなくてはと思った

平成15年度シドニー大学看護学部学生研修に関する報告

人 間 的 成 長	授業や病院見学で人の意見を聞いて、自分の考え方の甘さを感じた
	自分を知ることができた
	自分を見つめ直す機会になった
	受け身の自分を変えていきたい
	今後は計画性をもって人任せにせず、人と協力して取り組めるようになると思う
	人任せにしたところがあったと反省している
	何でもななあにになってしまうのは自分の性格だからしかたがないと思っていたが、それでは自分のためにならないし、ナースとして人の命を預かることはできないと気づいた
	責任・義務という考えが増した
	自分の意見を言うだけでなく、人の意見を聞いて柔軟に考えられるようになった
	以前よりも、真剣に取り組むことができるようになった気がする
	「キャリア」の方ばかりで刺激された
	勉強と遊びのメリハリがつけられるようになってきた
視野の広がり	他の国のことに興味を持てるようになった
	他の国はどんな風なんだろうと知りたくなった
	他の国に対して関心がもてるようになった
	より大きな視野で物事を見られるようになった
	広い視野で考えられるようになった
	今までになかった視野と視点を得ることができた
	視野が広がった
	グローバルな視点がある
	世界中の看護に関わる人が様々な意見をもっている
	自分が当たり前だと思っていることについてより考えていきたいと思った
将来への展望	興味のあることに対してどんどん吸収していきたいという欲求が湧いてきた
	今までとは違った世界をみることができた
	見学などで話を聞いて「こういう道もあるんだ」と思えた
	やりたいことが増え、今後の考え方の道しるべが見えた
	自分の看護に対するやるべきことが見えてきたような気がする
	ナースの地位の向上について、自分自身を変え、自ら行動しなければならないと改めて感じた
語 学 力 不 足 の 認 識	看護という専門分野でできることの多様性について考えるきっかけになった
	キャリアへの道などの話を聞いてためになった
	英語を勉強しないといけないと今までにないほどに認識した
	語学力のなさを痛感した
	英語に堪能でない自分に憤ることが何度もあった
そ の 他	英語を聞き取る力と話す力の必要性を感じた
	英語力をあげたい
	日本では感じることをできないことをいろいろ体験でき良い思い出になった
	プレゼンテーションするにあたっての考え方など参考になった
	パワーポイントの使い方を知った
	自分の意志を伝えることのできないもどかしさを知った。この経験を今後活かしていきたい
	未知のものに対する不安があった
	同じ世界で働く人が外国にもたくさんいることを知って励みになった
	学生やみんながパワフルでエネルギーに満ちた方で、強い刺激を受けた
	家族と離れて過ごし、自分にとっての家族の大切さを思いしらされた
	半年間英語を勉強したが実際に使えず、英語の勉強方法を反省した

生研修の成果を評価するための資料として使用することについて学生の承諾を得た後、その内容について分析をおこなった。なお、研修を通して自分が変化したことを記述した文章の提出にあたっては無記名とした。

学生研修に対する学生の評価を表3に示した。学生達はチュートリアルなど初めての形態の授業に参加できたことや、講義とチュートリアルという異なる形態の授業に参加できたこと、そして通訳があったことを良かった点として挙げていた。事前にオーストラリアの医療や看護について学習したことについては、シドニー大学での講義終了時には「事前に学習していたので、聞き覚えのある単語が出てきてわかりやすかった」と半数以上の学生が言っていたが、最終的には1名が良かった点として挙げたのみであった。しかし、後述する研修の成果とあわせて検討すると、その必要性はあると考えられる。また、語学力で学生を選考していない現状では、部分的な通訳は必要であると考えられる。改善して欲しい点では、7名中6名が期間をもう少し長くして欲しいと考えていた。

研修最終日に学生が研修を振り返って、研修を通して自分が変化したことについて記述した内容を分析した結果、「オーストラリアや日本の看護に関する理解」、「学習の姿勢や方法の違いに関する発見」、「自分自身の学習態度に関する反省や気づき」、「人間的成長」、「視野の広がり」、「将来への展望」と「語学力不足の認識」の7因子と「その他」が抽出された(表4)。

この結果から、学生達は研修を通して、単にオーストラリアの看護を知っただけでなく、我が国の看護に対しても興味を持ち、新しい知識を得ていたことがわかった。研修前にオーストラリアの医療や看護について学習していた際に、「これについて、日本ではどうだろう」という疑問がよく発せられていたことから、「他」を知ることによって、自分たちのことに対する興味が増していたことがうかがえる。また、この段階で生じた疑問がプレゼンテーションのテーマにつながっていたことから、準備の過程で日本の看護制度などについて調べる機会を得ることとなり、新しい知識を得ることができたと考えられる。また、研修期間中、病院見学などを通してオーストラリアの医療や看護の実際を知る機会を得、その都度、日本と比較しながら理解したり考えたりしたことが、オーストラリアの看護だけでなく、日本についても理解する良い機会となっていたようである。

シドニー大学看護学部の学生と一緒に授業に参加した経験は、チュートリアルという未体験の学習方法を知るだけでなく、シドニー大学の学生の授業に対する準備の状況や、授業への参加の仕方など、学習に対す

る姿勢について様々な発見をする機会となっていた。

それと同時に、今までの自分自身の学習に対する姿勢を振り返り、問題点に気づいたり反省したりする機会となっていたと考えられる。

さらに、研修を通して様々な看護者と出会ったことや、日本以外の国について知ったことで、視野が広がったり、他の国への関心が引き起こされていたようである。この様々な人々との出会いは、学生達にとって、将来への希望や意欲、新しい展望を抱く機会にもなっていたようだ。その他、7人で1つのプレゼンテーションを仕上げた経験、10日間今までは親しいつきあいのなかった学生と集団で行動した経験など、研修を通じた様々な経験が学生自身を成長させる機会になっていたようである。また、オーストラリア滞在中の経験から、改めて、語学力が不足していることを認識していたようである。

4. 学生研修の評価

前述のような結果から、平成15年度の研修はシドニー大学看護学部学生研修の目的を概ね達成していたと評価できる。また、研修の目的以外にも学生達には多くの成果があったと考えられる。昨年度の参加学生が研修を終えて「不備だと思った点」として挙げていた事項¹⁾については、今年度の学生の反応の中には認められず、改善できたと評価できる。今年度の学生研修の成果と昨年度の評価¹⁾を比較すると、概ね同様の反応であり、この学生研修が学生にとって有意義な経験となっていることがわかる。このようなことから、学生研修を継続していく意義はあると考えられる。

今後の研修に向けては、チュートリアルなど本学では導入していない形態の授業を含めた複数の授業への参加や、病院見学、交流会を継続できるよう調整していく必要があると考えられる。また、通訳の必要性が2年連続で認められており、現在のように選考の基準に語学(英語)や英会話の能力を設定しない選考方法を継続する間は、初日のオリエンテーションや病院見学時の通訳は必須であると考えられる。今回の評価では学生研修の目的の1つである「オーストラリアの文化を知る」という点の達成については評価できなかった。この点については次年度以降の研修に向けた検討課題である。さらに、研修期間について、昨年度の参加学生の半数が、今年度の参加学生では7名中6名が、「期間をもう少し長くして欲しい」と希望していた。この2年間の結果からは期間の延長を考慮することの必要性が見いだせるが、期間の延長については、シドニー大学に支払う研修費(現行1週間あたりA\$500)をはじめとする研修にかかる費用、学生が受けること

平成15年度シドニー大学看護学部学生研修に関する報告

のできる補助金、参加学生が確保できる可能性、本学での履修との関係など様々な点から、期間延長の可能性や延長する場合どの程度の期間とするのかなどについて、慎重に検討していく必要があると考える。

5. おわりに

平成14年度に引き続き、平成15年度もシドニー大学看護学部における1週間の学生研修を実施した。今年度の学生研修ではシドニー大学看護学部で開講されている3科目の講義とチュートリアルに参加し、2カ所の病院見学、シドニー大学看護学部の学生や教員との交流会を実施した。その結果、本研修の目的である「本学部が学術交流協定を締結したシドニー大学看護学部の学生との交流や、施設の見学などを通して、オーストラリアの文化や医療、看護を知り、国際的視野を養う」は概ね達成できたと評価できた。ただし、今回の研修ではオーストラリアの文化を知るという点については、学生の振り返りからは評価できなかった。この点については次年度以降の研修に向けた検討課題である。またこの研修は、学生達自身の成長の機会ともなっていることがわかり、研修の目的以外の成果も評価することができた。1週間という短期間の研修であっても、学生には有意義な研修であったことがわかった。シドニー大学看護学部の担当者との最終日の打ち合わせでは、学生の積極的な参加態度を評価するコメントがあり、問題等の指摘もなく、来年度も継続して本学からの研修の受け入れることを前提とした内容が話し合われている。今後の研修に向けては、チュートリアルなど本学では導入していない形態の授業を含めた複数の授業への参加や、病院見学、交流会、オリエンテーションや病院見学时などの通訳を継続して実施していく必要がある。また、研修期間の延長を希望する声もあり、この点についても検討していく必要がある。

最後に、現在のところ、本学の研修に対するシドニー大学看護学部からの正式な見解は示されていないが、2回の研修には協力的であり、平成16年度の研修に向けてもプログラムの改善などを本学と協議して前向きに取り組む姿勢が示されていること、2回の研修でシドニー大学看護学部の担当者と本学の担当委員会との間に太いパイプができ今後の大学間交流を発展させていく基礎作りとなっていることなどからも、本研修を継続させていく意義はあると考えられる。

謝 辞

今回の研修にあたり、学生の研修プログラムを調整していただき、研修期間中の学生の様々な活動について支援して下さったシドニー大学看護学部 Alumni & Professional Relations OfficeのDirectorであるMs. Judith Romanini、Ms. Romaniniの補佐として学生の活動を細やかに援助して下さったMs. Nada Dunda、病院見学などの通訳を務めて下さったMs. Taeko Rocheに感謝申し上げます。さらに、研修の旅行を取り扱い渡航準備の説明等ご協力くださいました近畿日本ツーリスト名古屋教育旅行支店渡辺泰三氏、牛島美由紀氏、シドニーに同行して下さった尾崎伊都子助手、学生研修のための事務手続きをはじめ学生研修を支えてくださいました看護学部事務室の皆様へ深謝申し上げます。

今回の学生研修は、名古屋市立大学(大学間交流学生派遣費用旅費補助金)と名古屋市立大学後援会からの補助を受けました。

文 献

- 1) 森 雅美, 河合洋子: シドニー大学看護学部での本学学生の研修—平成14年度研修に対する参加学生の評価について—, 名古屋市立大学看護学部紀要, 4, 41-48, 2004.

(受稿 平成16年10月15日)

(受理 平成16年12月7日)